

中絶の関係する再生型事例

A Case of the Reincarnation Type Involving Abortion

大門正幸

OHKADO Masayuki

This article reports a rare case of the reincarnation type. The case is rare for the following two reasons. First, the case involves abortion: The child made remarks apparently suggesting that he was the child aborted at the age of three months when his grandmother was pregnant. When asked who he had been with before he was born, the child said: "I was with grandma, grandpa, mom, and Hie (the name of his uncle)," implying that he was with his parents (his present grandparents), his sister (his present mother), and his brother (his present uncle). This interpretation appears to be further supported at least to the child's family members by the child's behavior of (i) clinging to the neck of his mother or his parents when he sleeps or when he is embraced as if he desperately refuses to leave them (this time), and (ii) asking his family to discard the "proof of service," a document commemorating the service for the aborted child, displayed in the living room of his grandparents' house, saying that: "This was me!" The second interesting feature of the case is the involvement of a natural spirit, specifically a fox spirit. The child appears to be able to see the fox spirit and to have conveyed the spirit's messages that were relevant to his grandmother's health. The presence of natural spirits is often reported in spirit-related episodes in Japan but rarely in those in the West, so the present case is also interesting in that it reflects the typical Japanese features.

Keywords: case of the reincarnation type, abortion, natural spirit, fox, inari

1. はじめに

本稿では、二つの点で希少な再生型事例を報告する。一つ目は、中絶された子が生まれ変わったように思われる事例であるという点である。生まれてくる予定の子供の霊が自分を中絶しないように訴えた事例や、霊が中絶を誘発する可能性については、Stevenson(1997; 2001)でも報告されているが¹、事例の中心人物が中絶の対象者であったという事例は、筆者の知る限りではTucker(2005)が報告しているケンドラ・カーター(Kendra Carter)の事例の

¹ Stevenson, 1997, p. 794, p. 1024 および Stevenson, 2001, p. 73, p. 243 を参照。また、霊が中絶を誘発する可能性については、Stevenson, 1997, pp. 2018-2019 を参照。

みである (Tucker, 2005: chapter 6)。この意味で、本稿で紹介する事例は稀な一例であると言える。第二に、本事例では、自然霊 (動物霊) が関係する。三浦 (2008) が指摘するように、日本の心霊現象の際立った特徴の一つとして自然霊の関わりが挙げられるが、本事例においても稲荷 (狐霊) が関係しており、再生型事例としては稀有な例である。

2. 先行研究における中絶の関わる事例：ケンドラの事例

ここでは、Tucker (2005, chapter 6) が報告している、唯一の中絶事例について紹介しておこう。

米国フロリダ州在住の女兒ケンドラが水泳教室のインストラクターであったジンジャー (Ginger) に会ったのは、彼女が教室に通い始めた 4 歳半の時であった。ジンジャーを見たケンドラは、ジンジャーの膝に跳び乗り、愛情に溢れた振る舞いを見せた。ジンジャーと出会って 3 週間後、レッスンを休まなければならなかった時には泣き続け、その直後にレッスンに行くと、それ以来ジンジャーの話ばかりをするようになった。

数週間後、ケンドラは、ジンジャーの赤ちゃんが死んだこと、そしてジンジャーは病気だったので赤ちゃんを押し出した、ということ話を話した。母親がケンドラにどうしてそんなことを知っているのか、と訊ねると、「私は彼女のおなかにいた赤ちゃんだったの」と言った。母親が知る限りでは、ケンドラがジンジャーと接触したのは水泳教室でのレッスンだけであり、しかも二人が一緒の時には自分もその場にいたので、ケンドラがジンジャーからこのような話を聞いたという可能性はなかった。ケンドラは「ジンジャーが悪い人に自分を引っ張り出させた。自分は留まろうとしたけどダメだった。その後は暗く冷たい場所にいた」と語った。ケンドラの母親が後に確認したところ、ケンドラが生まれる 9 年前に、未婚で神経性食欲不振症に悩まされていたジンジャーは胎児を中絶していたことが分かった。

ケンドラはジンジャーが自分を出産できなかつたので自分は死んでしまうという思いに駆られ「死んじゃう。そして今度は帰ってこれなくなっちゃう」と繰り返すようになった。母親がセラピストに相談したところ、ジンジャーの元に生まれ直すワークをしてはどうかという提案がなされ、その通りにしたところ、ケンドラの症状は落ち着いた。

ケンドラは、ジンジャーと一緒にいる時は陽気で幸せそうだったが、ジンジャーと別れると物静かで内にこもってしまうので、母親がケンドラにジンジャーと一緒にいることを認める時間はどんどん長くなり、最後にはジンジャーは自宅にケンドラ用の部屋を準備し、ケンドラは 1 週間のうちの三日をそこで過ごすようになった。

しかし、やがてケンドラの母親はジンジャーと不和になり、ケンドラはジンジャーと会うことができなくなってしまった。それから 4 ヶ月半の間、ケンドラは口を開かなかつた。また、何にも興味を示さず、食も細くなり、長時間眠るようになった。ケンドラが再び話すようになったのはジンジャーと再会し、彼女に「愛している」と告げてからだ。ジンジャーは再びケンドラを家に呼ぶようになったが、ケンドラは以前ほどには喜ばず、ジンジャーと一緒にいることに居心地の悪さを感じ始めたようだった。

3. 当事者・関係者・調査

本稿で報告する事例の中心人物は東京都 A 市在住の男児アオくんである。2016年9月に同市に生まれて以来、両親と暮らしている。兄弟はいない。近くに母方の祖父母が住んでおり、母親のアユミさんと2週間に1、2度の頻度で祖父母宅を訪れている。母親と祖父母のヒロユキさん、トミコさんは、1989年に祖母が中絶した子供（アユミさんにとっては弟）の生まれ変わりではないかと考えている。

事例調査のきっかけは、アオくんの祖母トミコさんからの筆者へのメールである。2019年6月に連絡を受け、何度かメールのやり取りをした後、トミコさん、ご主人のヒロユキさん（アオくんの祖父）に電話で話を聞いた。また別の日に母親のアユミさんにも電話で話を聞いた。さらに、同年9月にトミコさんの友人で徳島県在住のアサミさんとLINEを通して、またトミコさんの義妹（ヒロユキさんの妹）とメールと電話を通して、それぞれインタビューを行った。その後、同月にトミコさん・ヒロユキさん宅を訪問し、お二人および母親のアユミさん、アオくんと面談を行った。この日はアオくんの3歳の誕生日の5日前であった。面談の後、内容確認のためにトミコさんとは何度かメール・LINEのやり取りをしている。

4. アオくんの事例

4.1 アオくん誕生までのいきさつ

アオくんの祖父母であるヒロユキさん・トミコさん夫婦には1988年2月生まれのアユミさんと1989年4月生まれのヒデオさんという二人の子供がいる。1989年の10月か11月頃、第三子の妊娠が判明した（妊娠3ヶ月）。しかし、二人の幼子を育てている最中であった夫婦は、やむなく中絶を選択した。性別は不明だが、後述の「男の子」の存在や、アオくんの性別から、ヒロユキさん・トミコさんは男だったと感じている。

アオくんの母親となるアユミさんは、幼い頃から霊感が強く、霊的な存在を感じるが多かった。その中でも印象に残っているのがいつも家にいた5歳くらいの男の子のことである。この男の子はアユミさんが小学校から帰ると必ず玄関まで迎えに来て、部屋までついてきていた。転居した後もついて来たので不思議に思っていたが²、特に恐怖心を感じることもなく、また、その子と話をするようなこともなかった。

アユミさんから家にいる男の子の話を聞いた時、トミコさんは中絶した子ではないかと感じた。ヒロユキさんもアユミさんから話を聞いた時に、同じように感じた。2004年の2月か3月、徳島県に嫁いでいた友人アサミさんがトミコさん宅を訪れた時に、トミコさんが、中絶した子供の供養を考えているという話をしたところ、アサミさんは、自分の姉が水子供養をしている徳島の極楽寺（日照山無量寿院極楽寺）の話をした。その夜、トミコさん宅に泊まったアサミさんが、霊的な存在が寝床に来ていると感じその話をトミコさんにしたところ、トミコさんは家のお祓いをする気になり、アサミさんに徳島県の祈祷師を

²一家は4回転居している。転居先は東京都内が3回、関西圏が1回である。

紹介してもらい、同年の春にお祓いをしてもらった。祈祷師に中絶した子供がいることを伝えると、すぐに供養しなさいと言われたので、極楽寺で供養することにした。極楽寺を選んだのは、アサミさんから「人が絶えないので水子が寂しがらなくていいのではないか」と聞いていたことと四国遍路八十八か所の2番という大きな寺であるというのが主な理由であった。

2004年の夏、ヒロユキさん、トミコさん、アユミさん、ヒデオさんの4人は極楽寺に行き、現地でトミコさんの友人のアサミさんと合流した。供養の読経中に、トミコさんとアユミさんは、右側にある蠟燭の炎がメトロノームのように規則正しく揺れるのに気づいた。さらに左側にある蠟燭の炎も同じように揺れ始めた時に、アユミさんがトミコさんに向かって「煙がお坊さんの前から湧いてきて（水子が）喜んでいいる」とささやいた。トミコさんに煙は見えなかったが、この時涙が溢れ、罪の意識を感じ、中絶したことを詫びた。また、この時までは生まれ変わりなど信じていなかったトミコさんだったが、「もし生まれ変わることができるなら、アユちゃん（アユミさん）の子に生まれてきてちょうだい。今度は大事にアユちゃんと育てるから」と念じ、生まれ変わりを信じることにした。

この時の出来事について、同行したアサミさんは供養の場にはいなかったが、供養が終わった後、トミコさんから蠟燭の炎の話聞いたこと、また自分が体験した同様の話についてトミコさんに語ったことを記憶している。

家族は永代供養の手続きをし（図1）、証文を受け取って帰宅した。

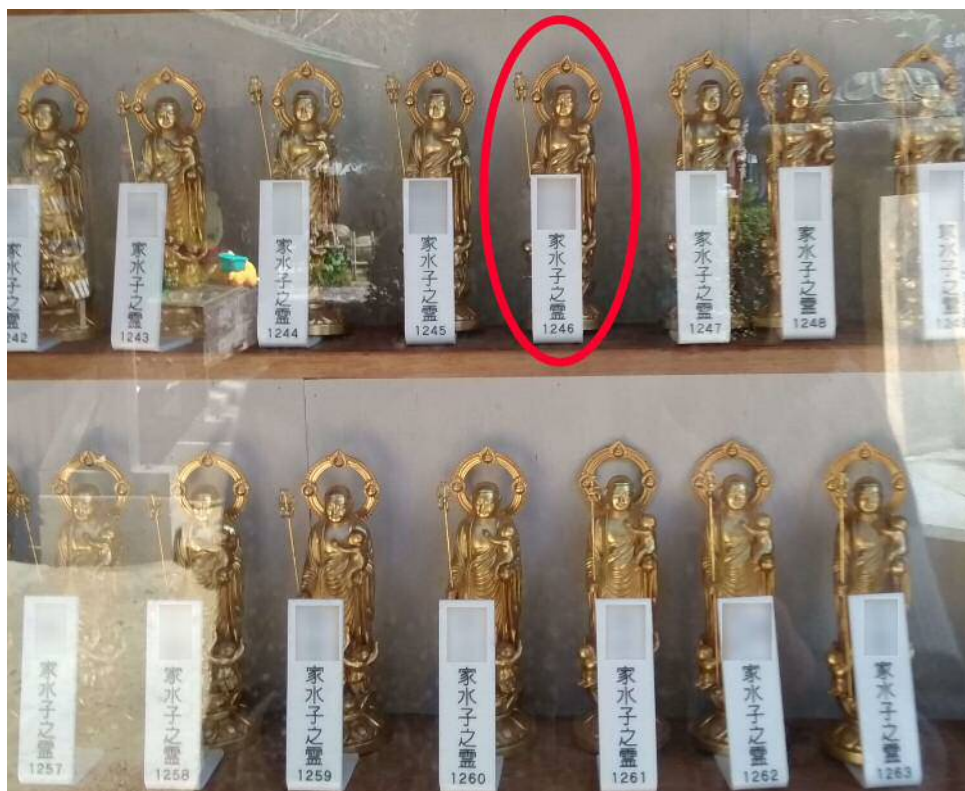


図1 極楽寺の永代供養の地藏

帰宅後、仏壇を買うまでは仕舞っておこう、と証文を引き出しに入れておいたところ、トミコさんだけしかいない昼間に引き出しから「う～ん、う～ん」という子供の声が聞こえた。あわてて証文を取り出してテーブルに置き、アユミさんにそのことを話したところ、みんながいつもいるリビングに置くのがいいと提案されたので、証文は図2のようにリビングの電話の下に置かれることになった。そして、トミコさんは、証文を前に、中絶した子供に対して「娘の子供に生まれてくるように」と祈り続けた。



図2 証文の写真（アオくんの右）

2008年頃のこと、トミコさんによれば、アユミさんが大変印象的な発言をしている。親戚と食事をしていた時にその一人がアユミさんに対して「そろそろ結婚を考えないといけないな」と言ったのに対し、トミコさんが「いやいや、結婚せずにいつまでも家にいた方がいい」と発言した。これに対してアユミさんは「ダメだよ、だって私お母さんの子を生まなきゃいけないんだから。生まれる気満々でいるよ！」と返答した。アユミさんはその時の発言を記憶していないが（お酒に酔っていたのも理由のひとつかも知れない）、アユミさんの発言に驚いて必死にその場を取り繕ったトミコさんには大変印象的なできごとであった。

2015年に結婚したアユミさんは、2016年9月にアオくんを出産した。妊娠が分かった時、アユミさんは中絶した子が生まれてくるのではないかと感じた。一方、トミコさんは、その可能性を考えつつも、アオくんの出産予定日が父方の祖母の誕生日と同じだったことから祖母の生まれ変わりではないかと感じた。しかし、結局アオくんの誕生が予定日の1週間後の自分の誕生日と同じ日になったため、やはり中絶した子供の生まれ変わりだと思うようになった。

4.2 アオくんの母斑と容姿

アユミさんとトミコさんによれば、アオくんには生まれた時、左右のどちらかの指（おそらく人差し指）に三つならんだ黒子があったという。とても意外で印象的だったのでよく記憶しているとのことだが、三つのうちの二つは1~2日で消えてしまい、残りの一つも1ヶ月ほどで消えてしまったという。二つが消えた時に、アユミさんは、それぞれの黒子はアユミさん、ヒデオさん、生まれてこなかった子を指しており、最後の一つが自分だということを示している、と解釈した。そのため、最後の一つも消えてしまった時にひどく不思議に感じたとのことである。残念ながら写真は残っておらず、黒子について筆者自身は確認できていない。トミコさんによれば、アユミさんのご主人は黒子があったことは記憶しているが、場所は覚えていないとのことである。ヒロユキさんは黒子があったこと自体を記憶していない。

また、アオくんの容姿は幼い頃に見ていた5歳くらいの男の子に似ており、その点でも、中絶した子供と5歳くらいの男の子、そしてアオくんの霊的な繋がりを感じているとのことである。

さらに、2019年の11月、3歳2ヶ月になったアオくんが青色のズボンしか履きたがらないことをトミコさんに伝えている時に、アユミさんは自分が幼少の時に見えていた男の子がいつも青いズボンを履いていた（上はよく見えなかったが白っぽかった）ことを思い出し、その子とアオくんとの繋がりを一層強く感じた。

4.3 アオくんの発言・行動

アオくんは祖父母であるトミコさん、ヒロユキさんに大変なついており、筆者が面談をした時もその様子を垣間見ることができた。二人が抱っこをすると必死に首にしがみつくような仕草を見せるが、「今度は別れたくない」という気持ちの現れではないかと二人は考えている。アユミさんによれば、3ヶ月くらいから添い寝の時にアオくんが自分の首にしがみつくことに気づいたが、赤ん坊は皆同じだと思い特に気にしていなかったとのことである。図3は、母親のアユミさんの首にしがみついて眠るアオくんの写真である。

アオくんが2歳を過ぎた頃、少し話ができるようになったので、アユミさんが「生まれた時のこと」を訊いたところ、アオくんは「卵からパッカーンと生まれてきた」と語った。これは面談後にもまだ語っており、面談後のトミコさんからのLINEによれば、言うことを聞かない時にアユミさんが「卵に戻るよ！」と言うと聞き分けがよくなるとのことである。

る。



図3 母親にしがみついて眠るアオくん

また、アオくんが2歳3ヶ月の頃、アユミさんが「生まれる前は誰といたのか」と訊いたところ「ママとじいじとばあばとひえ」と答えた。「ママ=アユミさん」、「じいじ=ヒロユキさん」、「ばあば=トミコさん」、「ひえ=ヒデオさん」と考えれば、アユミさんの結婚前の生活を指してのことと考えられる。現在の父親のことやヒロユキさん・トミコさんが飼っている犬アズキちゃんが入っておらず、この解釈が妥当であることを示唆している。なお、この点についてアオくんは、面談時に筆者に対しても同じ内容を語った。

2018年12月、アオくんを連れてヒロユキさん・トミコさん宅に来ていたアユミさんがアオくんが語った「生まれる前に一緒にいた人の話」について話していたところ、突然アオくんが水子供養の証文のある棚の前に行き、そこにあったメジャーを手を取った。それを延ばしたり引っ込めたりしながらアユミさんのそばに戻ったが、またすぐにメジャーを戻しに行き、証文を指差しながら、トミコさんに向かって怒ったように「これナイナイするの!」と言い出した。「全部捨てていいの?」とトミコさんが言うと「じえーんぶしゅてるの!」の返事。トミコさんはそこにあった水の入った容器、線香、2個のぬいぐるみを一一つ手に取りながら、「これ捨てるの?」と確認し、テーブルに置いていった。最後に証

文を手にとって「これも捨てるよ」と言うと、「うん、しゅてるの！ これはアオくん！」と証文を指差しながら言った。ヒロユキさんは「えー！」と驚きの声を上げたが、トミコさんとアユミさんはあまりの驚きに声を出すことができなかった。三人とも、「やはりアオくんは中絶した子供の生まれ変わりだ」との思いを強くした³。証文は破棄するわけにはいかなないので、極楽寺に連絡を取って事情を話し、郵送で返却した。

2019年3月、トミコさんは、アユミさん、アオくん、そしてヒロユキさんの妹のノブコさんと一緒に4人で、お礼とお布施を渡そうと極楽寺を参った。(ノブコさんが同行することになった理由については、後述。) 極楽寺でトミコさんが「ここに来たことがあるか」とアオくんに訊いたところ、「来たことある」との返事が返ってきた。お布施を渡した後、境内を散策していると階段の上の方から読経の声が聞こえたので階段の下まで行くと、アオくんは「こわい」と言いだした。またアユミさんは霊的なものを感じて「肩が重い、ダメだ！」と言った。売店で水晶の数珠を買って身につけたところ、肩の重さが解消されたので「軽くなった」と言いながらアユミさんがアオくんを抱き上げたら、アオくんがアユミさんに「なんでママそれしてるの？」と訊ねた。アユミさんが「お友達（霊的な存在）が乗ってくるの」と答えたところ、アオくんはアユミさんの肩を手で祓いながら「乗っちゃダメ」と言った。

帰路、アユミさんがアオくんをチャイルドシートに座らせようとした時に、アオくんは「お友達乗っちゃだめ」と繰り返し発言した。この発言に気づいたのはヒロユキさんの妹のノブコさんだったが（アユミさんはアオくんをチャイルドシートに座らせる作業に没頭していた）、ノブコさんからその話を聞いたトミコさんは、極楽寺にいた霊的な存在が自動車に乗り込もうとしていたのではないかと解釈している。なお、アユミさんと同じようにアオくんにも霊的な存在が見えるようで、しばしばそのような発言をすることがある⁴。

過去生と関係するアオくんの発言・行動をまとめると表1のようになる。

表1 アオくんの容姿・母斑・行動・発言のまとめ

番号	年齢	事項
①	誕生時	指に三つ並んだ黒子。二つは1～2日で、残りも1月程で消える。
②	誕生時	幼少期アユミさんに見えていた5歳くらいの男の子に似た容姿。
③	3ヶ月	首にしがみついて寝る。抱っこされる時も同様。
④	2歳3ヶ月	生まれる前は「ママとじいじとばあばとひえ」といた、と発言。
⑤	2歳3ヶ月	証文を指して「これはアオくん」と発言。
⑥	3歳2ヶ月	青いズボンしか履きたがらない(②の男の子の姿と共通)

³面談後のトミコさんからのLINEによれば、トミコさんがアオくん「(水子供養の後)生まれる前はどこにいたの？」と訊ねたところ、「星にじいじ(神様な存在?)といた。そこは青い」と返答したとのことである。さらにその後、「じいじとばあばの卵を選んで、今はママとパパの卵」と話したとのことである。

⁴アユミさんはアオくんを出産してからは霊的なものを見ることはほとんどなくなったとのことである。

4.4 アオくんの靈感

アオくんにも霊的な存在が見えていることを示唆するような出来事がいくつかある。

アユミさんにとって印象に残っている出来事としては、埼玉県にある父親（アユミさんの夫）の実家に行った時のことが挙げられる。既に他界している父方の祖母（アオくんの父親の母親）の仏壇の方を見てアオくんが「ばあばあがいる！」と発言した。アユミさんが「(その人は) 何か言ってる？」と訊ねると、アオくんからは「笑ってる」との返事が返ってきた。父方の祖母もトミコさんとよく似ていたとのことで、仏壇の前にいた父親の母親の霊体をトミコさんと思ったのではないかと思われる。

後述のように、アオくんには狐の霊らしきもの（こんこん）が見えていて、メッセージを受け取ったりすることがある。クッションの上に「こんこんがいる」と言って、撫でるしぐさをしたり、「お山に帰った（ので今はいない）」と言うこともある。この狐について面談の日に筆者がアオくんに訊ねたところ、「今日はいない」との返答であった。

5. 動物霊との関わり

イギリスでスピリチュアリズムを研究し、日本心霊科学協会の元理事である三浦清宏元 明治大学教授⁵は、心霊科学研究の歴史を詳細に検証した著書『近代スピリチュアリズムの歴史～心霊研究から超心理学へ』の中で日本のスピリチュアリズム特有の問題の一つとして、自然霊が背後霊になっている場合が多いことを挙げている（三浦, 2008, pp. 291-293）。

背後霊には、竜神、天狗、蛇、狐狸などの、いわゆる「自然霊」が非常に多いのだ。これが日本のスピリチュアリズムを欧米に比べていっそう複雑で不可解なものにしている。日本人の霊的世界の最大の特色である。土俗的というか、民族本来の姿というか、日本人の心の奥を覗くとこういう景色が見えるのだ。

守護霊として他に抜きん出て多いのが竜神である。（中略）

一方、山に縁のある守護霊としては天狗がよく出てくる……。 （中略）

次に、隙あらば人間に取りつこうと狙っている、守護霊または指導霊としては甚だ信用が置けない自然霊がいる。狐、蛇、狸などで、このうち狐がいちばん多い。「白狐」などと言われて人間に福をもたらすと思われている狐もあるが、霊能者にとっては最も油断のならない存在である。よく騙されて、守護霊として崇めていることがあるのだ。

霊能が出始めた者が必ずと言っていいくらい憑依されやすいのがこの「低級霊」と言われているものたちである（「さにわ」の経験者から聞いたところによれば、一人前のそういう邪霊たちを浄化することが大事で、それを「掃除する」と言うのだそうである）。その中でどうして狐がこんなに多いのか不思議だが、昔から全国津々浦々に稲荷神社があることを考えれば納得出来ないこともない。稲作の吉凶と切っても切れない縁があっ

⁵芥川賞受賞作家でもある三浦氏には、イギリスでの霊的体验を記した『イギリスの霧の中へ～心霊体験紀行』（三浦, 1989）や『幽霊にさわられて』（三浦, 1997）がある。

たのである。しかしそんな行事とはまったく縁が無くなった現代の子女が、トランス状態になると狐や狸が飛び出してくるのは現代の怪である。欧米では自然霊は絶対と言っていいくらい人間には憑依しない。妖精などは自然霊だが、人間に悪戯をすることはあっても人間社会に混じって出るというようなことはない。馬や犬、猫などが霊界で昔の主人に会うというような話は耳にしたことはあるが、馬が人間に化けて出てきたというようなことは聞いたことがない。

本事例においては、狐の霊が関係するが、自然霊に関わる再生型事例は、報告されている限りでは本例が初めてではないかと思われる。

5.1 トミコさんの実家と狐との関わり

トミコさんの実家は都内のH村である。トミコさんには、狐に関するいくつかの印象深い思い出がある。

一つは、トミコさんが、幼い頃から熱が出ると必ず見ていた夢である。赤いちゃんちゃんこを着た狐がたくさん並んでいるが一か所だけ空席になった場所がある。そこが自分用の場所だと感じ、その場所に収まると他の狐に押されて下に落ちる。その場面でいつも目が醒める。(赤いちゃんちゃんこが還暦の象徴だとすれば、自分が60歳で死ぬことを象徴しているのではないかと、トミコさんは感じている。)

もう一つは、狐が自分の後をついてきた、という思い出である。トミコさんは小学校の中学年から高学年まで、夕方、買い物によく行っていた。薄暗くなった玄関を出ると、店まで「チッチッ」という小さな音がついてくる。川を渡る時だけ気配がなくなる。店に行くと店の外で待っていて、店から出ると家までついてくる。母親に「チッチッ」という音がついてくる、と訴えたら、「それ、狐のお使いだから」と言われ、それ以来、トミコさんはなんとなくその存在に恐怖を感じるようになった。

また、トミコさんは実際の狐を見たことがないのに、狐の匂いが分かった、という。結婚前、上野動物園に行った時にその匂いがしたので「この辺に狐がいる」とヒロユキさんに告げたら、実際に狐の小屋があるのを発見した、という出来事があった。この件については、ヒロユキさんも記憶している。

トミコさんの、狐に関する思い出の中で、最も印象深かったのは次の出来事である。

小学校の中学年から高学年の頃、トミコさんと母親、弟の三人だけが家にいるということがあった⁶。弟は発熱のため奥の部屋で寝ており、トミコさんと母親は居間でテレビを見ていた。母親が弟の方を見たので、つられて同じ方向を見ると、両手を上げ、目のつり上がった狐のような形相をした弟が枕元に立っているのが見えた。トミコさんと目があつたとたん、弟は寝床とトミコさんの座っている場所との中間ぐらいの場所に瞬間移動、続いて、トミコさんの前に瞬間移動し、見下ろしながらトミコさんを睨んだ。恐怖に駆られたトミ

⁶トミコさんには二人の弟がいる。この時在宅だったのは上の弟である。

コさんは叫び声を上げ、慌てて母親の後ろに隠れた。その時、母親が「狐憑きだ！」と言
い、続いて「しっしっ」と祓うような言葉を投げかけた。すると弟は寝床の方向に何度か
瞬間移動し、その度にトミコさんを睨みながら、最後には床に入って寝てしまった。次の
朝、弟にそのことを話すと、本人は全く覚えていなかった。この出来事について、トミコ
さんの母親はアユミさんに話したことがあり、アユミさんもそれをよく覚えていた。また
ヒロユキさんも、結婚後トミコさんの実家を訪れた時に、そのような出来事があったとい
うことをトミコさんの母親から直接聞いている。飼い犬のアズキちゃんがその時の弟と同
じような姿勢を取る度に、当時のことを思い出すとのことである。

なお、トミコさんの母親がトミコさんやアユミさんに語ったところによると、その部落
では長男が必ず狐憑きになるとのことであるが、その現象は否定的なものとはみなされて
いなかったようである⁷。

5.2 飼い犬

既に何度か触れたように、ヒロユキさん・トミコさん宅には「アズキ (アズちゃん)」と
いう名前の飼い犬 (柴犬) がいる (図 4)。幼い頃に犬に追いかけられたことがあり犬恐怖
症と言っていいほどに犬嫌いなトミコさんがこの犬を飼うようになったのは、2011 年、ト
ミコさんがホームセンターでこの犬を見た時に「(この犬に) 以前に世話になったので飼っ
てあげなければならない」と強く感じたからである。アユミさんがいくら犬を飼いたい
と言っても断固拒否していたトミコさんの変貌ぶりに、アユミさんもヒロユキさんも心底驚
いたとのことである。5.4 節で触れるアオくんの発言にこの犬が関係してくる。



図 4 飼い犬アズキちゃん

⁷「狐憑き」については、桜井(1980, pp. 97-98)、佐々木他監修(1998, p. 140)、鈴木(1982, pp. 202-204)などを参照。

5.3 稲荷神社

2007年頃、当時大学生だったアユミさんが、「いなぎじんじゃが呼んでる」と言い出したことがあった。テレパシー的に「いなぎじんじゃ」という言葉が聞こえてきて、母親に伝えなければいけない、と感じたという⁸。アユミさんの目には、神社の姿と拝殿の奥にいる翁、その前に立つ女神のような女性と、神社の周りの草むらで跳ね回る狐の姿が見えたため、「じんじゃ」が神社であることは間違いなさそうであった。「いなぎ」は東京都の稲城市のことかと思われたが、調べた限りでは「稲城神社」は存在せず、アユミさんにもトミコさんにも、どこにある神社のことなのかは分からないままであった。

アユミさんが「いなぎじんじゃ」の話を何度かした後、トミコさんはふと「いなぎ」は「稲荷」ではないか、と思いつき、アユミさんに「いなりじんじゃ」ではないかと訊ねた。アユミさんは稲荷神社のことを知らなかったため、トミコさんは稲荷神社の説明をすると同時に、実家のそばの山の上に神社があって、友人の母親がおいなりさんを作って神社に持って行ったこともあるので、稲荷神社だったかも知れないという話をした。トミコさんは、その稲荷神社が呼んでいる、ということなのかも知れないと思ったが、山の上の神社に行くのは気が進まないのものでそのままにしておいた。

2018年の3月、トミコさんは身体の不調に悩まされるようになった。喉の痛み、声がれ、咳、痰、胸の圧迫感、倦怠感といった症状が続くためいくつもの病院に行ったが原因は分からず、50キロあった体重は43キロにまで落ちた。死期が近いのかも知れないと感じたトミコさんは、葬祭場の説明会に行ったり、身辺整理を始めたり、エンディングノートを準備したりするほどであった。

ふと、10年ほど前にアユミさんが「稲荷神社」と言っていたことを思い出したトミコさんは、2018年11月、ヒロユキさんに頼み、ヒロユキさんの運転で実家の近くの稲荷神社に行った(図5)。山の麓の学校に自動車を置き、山の中を40分ほど歩いて稲荷神社にたどり着いたトミコさんは、「遅くなって申し訳ありません。私に何をお求めかを娘に伝えてください」と願いながら手を合わせた。

その後、枯葉の掃除をしていたら「平成19年[2007年]12月22日」と書かれた細長い板が落ちていたのを見つけた⁹。拾って裏返すと、トミコさんの父親が拝殿等に寄進したことが書かれていた(図6)。驚いたトミコさんは、その板をヒロユキさんに見せ、すぐにアユミさんにLINEで板の写真と神社の写真を送った。するとアユミさんからは、「(自分が見たのは)ここだ! ここだ! 稲荷神社! おじいちゃん寄進してたんだ」と返事が来た。

⁸アユミさんによれば、成仏している人の声は頭の上から降ってくる感じに聞こえるが、成仏していない人の声は耳から聞こえる感じだという。この時の「声」は頭の上から入ってくる感じだったので、アユミさんにとっては安心できる存在だったとのことである。

⁹後日トミコさんが宮司さんにその話をすると、お札が落ちることはありえない、と驚いていたとのことである。



図5 トミコさんの実家の近くの稲荷神社



図6 トミコさんの父親による寄進を示す札（表・裏）



図7 首の欠けた狛犬

トミコさんたちが神社を掃除をした後に裏に回ると、小さな祠があり、その横に首の欠

けた小さな狛犬が見つかった (図 7)。トミコさんは、ここに呼ばれたのは狛犬の修理のためではないか、とも思ったが、仮に新しい狛犬を作っても山頂に運ぶのは難しいのではないか、とも思い、アユミさんが何らかのメッセージを受け取るまではそのままにしておくことにした。

5.4 狛犬の修理

2018年12月、アユミさんとアオくんがやって来た時(4.3節で述べた、アオくんが「証文を捨てる」と言ったのと同じ日。その発言の少し前)、ヒロユキさんが入浴している時に、トミコさんは前月に撮影した稲荷神社の写真をアオくんに見せてみた。靈感のあるアオくんには自分には見えないものが見えるのではないかと考えてのことである。「ここに誰か写ってる?」と訊ねるトミコさんに、アオくんは「ママとじいじと怖いアズちゃん(飼っている犬の「アズキ」)」と即答した。その場にいたアユミさんは「アオくんに見えているのは、キツネではないか。アオくんはキツネを知らないの『アズちゃん』と言っているのではないかと考え、「アズちゃんじゃなくて、こんこんじゃない?」と訊ねたところ、アオくんは「こんこん?」と返答し、自分に見えているのが犬とは別の存在だということを知ったようであった。

その後、アオくんは、リビングの隣の部屋に行き、子供用の椅子に座っておもちゃのピアノを弾いて遊んでいたが、突然「怖い怖い、こんこん怖い」と言って、椅子とピアノを引きずりながらリビングに来た。リビングと隣の部屋を隔てる戸を勢いよく閉めるとソファに置いてあったクッションを2枚持ってきて重ね、「こんこんがここにのんのんしたいって!」と言うと、急いで戸を開き、クッションを1枚だけ持って隣の部屋に行った。それを机の下に置くと急いで戻り、再び戸を閉めた。クッションを1枚だけ持って行ったのは、図8が示すように、クッションが大きく、2枚は持っていけなかったためではないかとトミコさんとアユミさんは考えている。

アオくんの行動に驚いたトミコさんは、アユミさんと二人で狛犬の写真を見て、台座が2枚あることを確認すると、やはり狛犬を修理して欲しいということなのだと考え、お風呂から出たヒロユキさんに事情を話して次の祝日に施設に入所している父親の判断を仰ぎに行くことにした。

狛犬の修理をどうするべきか父親に相談したところ「宮司に訊くように」と言われ、宮司宅に足を運んだものの留守だったため、父親のいどこに相談したところ、宮司は常駐しておらず、時々来ているだけだし、年寄りばかりで神社に行く者はいないので、狛犬を直しても誰も文句を言わないから好きなようにするように、と言われた。ヒロユキさんの義弟(ヒロユキさんの妹の夫)が石材店を営んでいたため、ヒロユキさんの妹のノブコさんに狛犬の写真を送って直せないか相談してみた。年末、ヒロユキさんの義弟を神社に案内してもらったところ、作り替えることになったため、それなら「あずきちゃんをモデルに」と考え、後日、トミコさんは飼い犬の写真を送った。



図8 アオくんがこんこんに持って行ったクッション

2019年の正月が明け、ヒロユキさんの義弟から狛犬のサンプルができたと連絡があった頃、2018年の夏か秋に新聞に掲載されていた「上咽頭炎」に関する本の広告を思い出したトミコさんは、「上咽頭」で検索したところ、その本が見つかった。堀田修著『つらい不調が続いたら慢性上咽頭炎を治しなさい』（あさ出版）である。治療可能な病院が巻末に記載されていたのだが、全国で200に満たない病院の一つが近所にあることが分かり、診察を受けてみたところ、上咽頭炎であることが判明し、5回の通院でのどの痛みや倦怠感、声がれなどの辛い症状は嘘のように消えた。

ここまでの経緯をノブコさんに話し、3月の極楽寺行きの話をしたところ、同行を希望

した。そのため、トミコさん、アユミさん、アオくん三人の極楽寺行きにノブコさんが同行することとなった。

極楽寺から帰った後、狛犬の設置が決まり、トミコさんは、ノブコさんにおいなりさんを持って行くと連絡した。設置日の前日にアオくんが来ることになったので、作ったおいなりさんを見せながら「これをこんこんのところに持っていくけど、これでいいかこんこんに訊いて」と言うと、「これ(おいなりさん)はいらないって。おこめとおしゃけ(お酒)を持ってきて。あとコップも。あずちゃんは来ちゃだめって」と即答した。

アオくんの言葉を受け、トミコさんは米と酒、コップを持って、ヒロユキさん、ノブコさん、ノブコさんの夫と息子の5人で稲荷神社に向かった。途中、アオくんの発言について話をしたところ、塩・神酒・生米を持参していたノブコさんの一家は「2歳児がそんなこと言うわけがない！ 本当に(お稲荷様の声が)聞こえているんだな！」と驚いた。また、「あずちゃんは来てはダメ」というのは、神聖な場所なので獣が来てはいけない、ということではないか、と説明した。

稲荷神社に到着すると、5人は首の欠けた狛犬を祠の裏の木の下に埋め、新しい狛犬を設置し(図9)、祠の4隅に酒、塩、米を撒いて下山した¹⁰。



図9 新しく設置された狛犬

¹⁰ 一体目の狛犬と対になる2体目の狛犬は、2019年11月中旬に設置された。

その翌日、ノブコさんから、仕事でとても大きな依頼があったが、それが徳島（極楽寺の所在県）からの案件で、稲荷神のお礼／ご利益ではないか、との驚きの連絡があり、後日、トミコさんはノブコさん達と稲荷神社にお礼参りに行った。

6. 結語

本稿では、中絶の関係する再生型事例について報告した。本事例は中絶が関わるおそらく世界で二例目の事例であるというだけでなく、日本に特徴的であるとされる自然霊（動物霊）が深く関わっているという点でも稀有な事例である。中絶の場合、検証可能な過去生記憶はほとんど期待できないが、本事例においては、(i)生まれる前に一緒にいた家族に関する発言、(ii)証文は自分であるという発言、(iii)母親が見ていた霊的な存在との類似、などが当事者と過去生の人物との繋がりを示唆している。アオくんはまだ3歳になったばかりであり、今後、2節で紹介したケンドラのように話をする可能性も残されている。新たな展開があれば、稿を改めて紹介したい。

謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです（課題名：出生前記憶を語る子供の実態に関する研究 承認番号：260100）。調査にご協力いただいたトミコさん、ヒロユキさん、アユミさん、アオくん、ノブコさん、アサミさんに厚くお礼申し上げます。

参考文献

- Stevenson, Ian (1997) *Reincarnation and Biology: Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects*. Westport, CT.: Praeger.
- Stevenson, Ian (2001) *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation* (Revised Edition). Jefferson, NC.: McFarland & Company.
- Tucker, Jim B. (2005) *Life Before Life: A Scientific Investigation of Children's Memories of Previous Lives*. New York: St. Martin's Press.
- 桜井徳太郎編(1980)『民間信仰辞典』東京：東京堂出版。
- 佐々木宏幹、宮田登、山折哲雄監修・池上良正他編(1998)『日本民族宗教辞典』東京：東京堂出版。
- 鈴木 棠三 (1982)『日本俗信辞典<動・植物編>』東京：KADOKAWA.
- 三浦清宏(1989)『イギリスの霧の中へ～心霊体験紀行』東京：中央公論社。
- 三浦清宏(1997)『幽霊にさわられて～禅・心霊・文学』東京：南雲堂。
- 三浦清宏(2008)『近代スピリチュアリズムの歴史～心霊研究から超心理学へ』東京：講談社。